

「形あるもの」についての一考察・・
カルヴァンの画像全面否定を手掛かりとして

白石剛史

序

この小論において筆者は、礼拝における画像 (image) 等、「形あるもの」^①の使用について、カルヴァンの画像全面否定に対する検討^②を軸として考えたいのであるが、その前に、用語について触れるとともに問題点を限定しておくのが適当であらう。

聖書が偶像 (idol) 礼拝を禁じていることは、出エジプト記二〇章四(十戒の第二戒)により明白である。したがって、我々が検討する問題は、偶像を礼拝に用いることが許されるかどうかなのではない。像 (elikon)^③を用いることが許されるかどうかである。

人間が神のかたち (imago : elikon のラテン語訳) に作られたものであり (創一 : 二六)、イエス・キリストが見えない神のかたちであり (コロ一 : 一五)、人は救われるとそのイエスに似るものとなる (イヨハ三 : 二) ことを考

えれば、イコン論争は、創造論、キリスト論、人間論、救済論などの教理に関わる広さと重要性を持つていえる。従って、礼拝における像 (eikon) の使用を全面的に否定することは、理論的には人間のうちにある神の像やキリストにおける神の像、さらには救われた後の聖化における神の像の重要性を否定する危険性に我々を直面させるのである。

また、偶像礼拝であるとの理由によって礼拝における像の使用を全面的に拒否することは、そのように言う人自身が、特定の像を偶像と判断していることを意味することになる点に留意しなければならない。なぜならば、キリスト教界の中には、像を用いながらそれを偶像とは考えず、自らの礼拝をも偶像礼拝と考えていない人々がいるからである。⁽⁴⁾

確かに偶像礼拝は避けなければならない。しかし、何をもって偶像とするのか、形あるものはすべて偶像と言えるのかという点については、慎重に検討されなければならない。同じ「物」でも、ある人には偶像となり、ある人にはそうでないことがあるのではなからうか。例えば聖書の中では、あのモーセの青銅の蛇がその例である。モーセが掲げたものは仰ぎ見る対象として承認されるものだったのに(民数二一・九)、同じ青銅の蛇がヒゼキヤの時代になると偶像として破壊されるべきものとなっている(II列王一八・四)。

そのことを考えると、問題は「物(形あるもの)」の側にあるのではなく、「物(形あるもの)」を見、扱う「人」にあるのだと言えよう。言い換えれば、「物(形あるもの)」の質に偶像か否かの基準があるのではないということである。物の質を偶像礼拝の基準としようとする、「聖書を大切にすることはいけないことか」「イエスの絵を書斎に飾るのはどうか」「みことばの掛け紙は?」「絵は偶像になる危険性があるが音楽はないのか?」等々、際限なく疑問がわき、質問が飛び出すのである。やはり、問題は「物(形あるもの)」をどのように見るか、どのように扱

うかという人の側の姿勢が問題なのである。⁽⁵⁾

ところで、教会史の中で画像崇拜に対して極めて強い攻撃を行なったのは、多くの人々の知るとおりジャン・カルヴァンである。日本の福音派が形あるものに対して否定的、すなわち、形あるものを持つことがただちに偶像礼拝に陥る危険性をはらんでいるとの認識が強いと思われるのも、彼の影響が大きいことは疑いえない。そこで筆者はこの小論において、カルヴァンが礼拝における像の使用を全面的に否定した理由について、『綱要』⁽⁶⁾を主な資料として用いながら、以下の四点より検討してみたい。それを通して、カルヴァンの見方に片寄りがなかったのかどうか、筆者なりの意見を述べるためである。

- 一、ローマ・カトリック教会の擬人法的 (anthropomorphic) な画像使用。
- 二、カルヴァンにおける信仰の霊的側面の強調。
- 三、カルヴァンにおける神の超越性 (transcendence) の強調。
- 四、カルヴァンにおける信仰の知的側面の強調。

一、ローマ・カトリック教会における画像使用の特徴

カルヴァンの画像攻撃の第一の理由は、彼が直面したローマ・カトリック教会の画像使用の在り方、すなわち西方教会の画像理解と実践に対する強い反発によるものである。⁽⁸⁾十六世紀においては、魔術⁽⁹⁾や迷信と区別することが困難なほどの聖人崇拜が日常的であった。⁽¹⁰⁾美術画⁽¹¹⁾や遺物が礼拝の対象であり、それらは単にそれらを通し

て神を見上げさせるといふものではなく、病氣¹¹³を直したりする魔術的力と靈的力を持つものであった。言い換えれば、カルヴァンが直面したローマ・カトリック教会の当時の実例では、明らかに聖人の像は偶像だったのである。

加えて、これらのものを制作することそのものが救いにおける善き業の教理と結び付けられていた。すなわち、これらの像を作るといふ善き業が自らの救いに対して効力を持つという信仰の存在によって、ギルド単位、共同体単位で、彫像や絵画製作のための時間とお金とが捧げられた。¹¹⁴ 言い換えれば、多くの人々が意図的・自覚的にこれらの像作成の業に参与していたのである。

このような背景を考えれば、カルヴァンが物質的事物を持つこと自体に大きな危険を感じたのも当然であると言えよう。

二、信仰における靈的側面の強調

カルヴァンの画像攻撃は第二に、彼が信仰における靈的な面を強調したことによると言えよう。カルヴァンはローマ・カトリックの在り方を靈的礼拝と物的礼拝との混同であると非難した。¹¹⁵ カルヴァンは靈と肉の二元論に陥っていると言えはもちろん言い過ぎであるが、¹¹⁶ 「靈」ということが彼の像神学を理解するうえで鍵になることは間違いないであろう。

まずもってカルヴァンは、神は靈であるから、神の像も靈的なものであると考える(LXV:3)。それゆえに、すべての形あるもので神を表そうとすることは神の属性に反する、というのである(LXI:2)。

さらにカルヴァンは、神が靈なのであるから神のかたちの適切な座は人の靈であると考える(LXV:3)。¹¹⁷ ゆえに、

人の救いは人の靈的次元において成就するものだという。言い換えれば、墮落して神の像を失った人間は、救いによって完全な神のかたちであるキリストに継ぎ木され、靈的に(肉体的にはなく)キリストに似るものと変えられていくのである。¹¹⁸

加えて、カルヴァンによれば、人間が被造物として神の主権の下にへりくだるべき存在であることを考えると、神に対する礼拝も靈的なものでなければならぬ。¹¹⁹ 人は神に指図されたとおりに礼拝しなければならないのであるから、靈とまことによる礼拝こそが相応しいというわけである(ヨハ四:二三、二四)。

以上の点をまとめると、カルヴァンの靈的側面を中心とする像解釈は、彼が「朽ちるものは朽ちないものを相続できない」の原則を堅持しようとしたと言い得るであろう。

三、神の超越性の強調

カルヴァンの画像礼拝攻撃は、第三に彼が神の威光を守ろうとしたという点からとらえることができよう。¹²⁰ まずもって彼は、人間は神によって大変すばらしく作られたのであるから、人工的な装飾や努力を勞さずとも、あるがままで神に栄光を帰することができると言う。赤ん坊でさえも神の栄光を表しているではないか(LV:3)。それなのに、愚かな人間はその生まれながらに持っている尊い価値に気づかず、自らの手で像を作り、結果的に神の威光を傷つけているのである、というのである(LV:4)。¹²¹

それゆえ、カルヴァンによれば人間の努めは、神の威光を損なうところの形あるものを作る業をやめ、正しく神を知り礼拝することなのである。¹²²

またカルヴァンは、このような礼拝を「靈的礼拝」と呼ぶ。それは、物質的な小道具や人間の考案になる儀式に頼ることのないものである。そしてそれは神の超越性という観点からとらえることのできるものである。²³ カルヴァンは言う。礼拝は神に対する恐れと信頼に基づくべきであると。²⁴

さらに、カルヴァンの神の超越性への強調は、彼の救い理解にも見いだすことができる。彼は、クリスチャンの聖化は実体の変化ではなく質の変化であると考える。クーパーは、「創造者と被造物との相異を保持するために、(救いによる)変化が関わるのは、(人間の)実体に対してではなく、質に対してである。²⁵」(内筆者補足)と語っているが、まさにカルヴァンの考えを的確に要約している。

すなわち、救われることによってキリスト(神)に似るものとなると言っても、人が神になるわけではない。救いの後でも、創造者と被造物との区別は残るのである。

カルヴァンのこのような神の超越性の強調は、カルヴァンが今や言い古された言葉ではあるがしばしば忘れられがちになるところの、あの宗教改革の原則を堅持しようとしたという見方ととらえることができよう。その原則とは、*Soli Deo Gloria* である。

四、聖書を読み、学び、理解し、信じることの強調

カルヴァンの画像攻撃は、聖書の強調という点からも説明される。²⁶ 彼が聖書に最大の強調点をおいた理由は、聖書こそが人間をして神に対する本当の知識に導く唯一のもの、と彼が信じていたからである。²⁷ 彼のこの言葉は、カトリックが「無学な人々を教える書物」として画像を用いていたことを強く意識したものである(LXXI)。

さらには、カルヴァンの聖書の強調の背後には、彼が人間の靈の機能の理解において、知性²⁸と意志とのうち、知性こそが正しいことと悪いことを峻別する機能を有し、意志を方向づけるものであると考えていることがあると言えよう(LXXV)。このことのゆえに、彼は信仰における知的側面、すなわち、神が書かれたところの聖書を読み、理解するということを強調したのである。²⁹

第三には、彼は聖書を礼拝の具体的な指針を与えるものとして重視した。前述のとおり、靈的な礼拝とは神の指示にしたがってなされる礼拝であり、その指示を与えるものこそが聖書なのだから、聖書を重視するというわけである。³⁰

言うまでもなく、このカルヴァンの強調点は、宗教改革の大原則 *Sola Scriptura* の堅持である。

以上のように、筆者はカルヴァンの画像否定の背後にある理由を四つの点から整理した。すなわち

- (1) ローマ・カトリックの魔術的・迷信的偶像崇拜への攻撃
- (2) “*Finitum non est capax infiniti*.”の堅持
- (3) “*Soli Deo Gloria*.”の堅持
- (4) “*Sola Scriptura*”の堅持

ところで、カルヴァンが堅持しようとしたこれらの原則そのものは、今日の我々福音派も堅持せんとしている大切なものである。すなわち、我々も(1)福音の恵みが魔術や迷信と混同されないように注意深く宣教しているし、(2)人間の努力によってではなく、神の恵みによって新しく生まれなければ神の国に入れないという救いの教理の

根本を堅持し、(3)人間中心主義ではなく、創造者である神こそが絶対的栄光を受けるに相応しいお方であることを信じ、被造物としての限界と光栄との中で生きることの喜びを伝え、(4)聖書を神の唯一絶対の規範と信じているものである。

筆者もこれらの点においては、カルヴァンと全く同じ強調点を持っているのではあるが、同時にこれらの点の堅持に熱心になるがゆえに、それが聖書的な別の側面を否定することにつながる危険性に気を付けなければならぬことを感じるのである。人間は神ではないから、必ず「片寄り」という危険性をはらんでいる。いつの時代でも、時代の担い手のような役割を果たす重要人物の発言には、その時代が反映されているのであるから、時代的コンテクスト抜きに言葉だけが一人歩きすると、この「片寄り」という危険に陥ることになる。筆者は、以下にカルヴァンの強調点もたらしうる「片寄り」について言及してみたい。

五、カルヴァンの強調点を持つ危険性

①ローマ・カトリックの姿勢のみが画像に対する姿勢であるとの誤解をもたらす危険性

画像を一旦取り入れれば、必ず偶像礼拝になるという意見は、十六世紀のローマ・カトリック教会の実例だけを見ていたならば、当然沸いてくる恐れであろう。神の霊の力と画像が持つ魔力との区別がなくなるとなる危険性である。しかし、序で触れた通り、キリスト教界の中には、画像を礼拝において用いながら、偶像礼拝ではないとの見解を保持しているグループがあるのである。我々はそのグループ、東方教会の人々の見解を学んでみなければならぬ。それによって彼らの論理、彼らの世界観から学びうるところがあるであろう。

東方教会においては、霊界と物質界という区別は存在しない。霊の世界は聖く物質の世界は聖くないとか、霊の世界は永遠ゆえに尊いが物質の世界は一時的で過ぎ去るゆえに価値の低いものであるという考えが存在しないのである。むしろ、彼らはこの世を神の意志の映像と見、この世の中に天国を見ることを求める。

この世の物質界に対する霊界という意味で、天国の窓を霊界に開けられた窓とみなして、イコンを霊的にとらえるのは誤り。霊界と物質界は、あくまでも不可分なひとつの界と考えるのがギリシャ正教である。このひとつの界を、イコンの世界と呼んでもよい。霊的イコンなどという言い方がされるときには、物質にひめられた神の秘義を明らかにしているという意味合いを持つ。⁵⁰

すなわち、「神の国」か「この世の国」か、聖か俗かという二者択一ではなく、「この世の国」を「神の国」を写しだすべきものとして考えるゆえに、物的対象を持つから霊的でないとか、霊性が墮落するという見方は、東方では成り立たないことが覚えられなければならない。

②信仰が目に見えない世界にのみ傾いていく危険性

「そもそもどうして形あるものが必要なのか。そんなものなくても、聖書の明確な教えを通して神を知り、神を礼拝していれば十分ではないか」という考え方は、聖書の権威を強調するカルヴァンの主張から敷衍できるものであるが、この見解には二つの問題点がある。第一には、聖書そのものが語るところの、神が形あるものを用いて旧約や新約の信仰者を導いてこられた点を見失わせる危険なことであり、第二には、礼拝というもののその

ものが何らかの形 (form) を伴うものであるから、形を否定して礼拝しようとすること自体、自己矛盾を起すという問題である。

まず第一に、聖書において神が形あるものを通して信仰者を導かれた例についてであるが、それは旧約聖書において特に豊富である。神は目に見えないお方であるが、触知できる媒体を通して神の民に語りかけ、神の民を導かれた。例えば、神の箱、雲の柱・火の柱は神の臨在と導きの象徴であった。神はそこから民に語り（出エ二五・二二）、それに対する態度で、神に対する態度が示され測られたのであった。幕屋や神殿は神の臨在の場所であり、そこで使われる用具も含めて、その作り方から空間の用い方まで神によって規定され、その通りに製作された（出エ二六・一三〇章、一歴二八・一一―一九）。礼拝に関しても、神は単に礼拝の精神を教えられたのではなく、礼拝の形式（リチュアル）を教えられた（レビ一―七章）。すなわち時と場所と人材（祭司の役割）の用い方を規定されたのである。

イエスは旧約の安息日や会堂礼拝を忠実に守られたお方であるが、御自身に関してばかりでなく、新約時代の様子を見ても、イエスによって再定義されたシンボルを用いるやり方が初代教会に引き継がれており、洗礼における水、聖餐式のパンとぶどう酒、按手などの例がある。⁸¹ ただしイエスの場合、旧約聖書における神の指導がそうであったように、⁸² シンボルがシンボルだけで一人歩きすることに対する戒めを残された点もはつきりしている。⁸³

第二に、礼拝そのものが形あるもの (form) を否定しては成り立たないことが覚えられなければならない。前述の聖書の中における礼拝規定は、旧約聖書時代における礼拝が一定の形式を持つものであったことの例証となるものであるが、新約時代においても、イエスは旧約を破棄するために来られたのではなく成就するために来られたのであるから、共同礼拝における「形あるもの」の存在そのものは、継承されていると考えてよいであろう。⁸⁴ 実際、今日の非典礼教会にあっても、典礼教会とは異なった意味での形式が存在する。⁸⁵ それはプログラムと呼ばれたり礼拝順序と呼ばれたりするが、いずれにしても何らかの形 (form) が存在しない時、礼拝は渾沌としてしまう。パウロがコリントの教会に対して礼拝における秩序の大切さを指摘している通りである。

あなたがたが集まるときには、…すべてのことを、徳を高めるためにしなさい。…それは、神が混乱の神ではなく、平和の神だからです。（一コリ一四：二六、三三）

すべてのことを適切に、秩序をもって行ないなさい。（一コリ一四：四〇）

③ 受肉⁸⁶ 神学が軽視される危険性

礼拝を考える時、受肉の教理はきわめて重要である。すなわち、礼拝とは神とその民（人間）との会合であるから、⁸⁷ 本来墮落した我々人間が、完全に聖であられる神と会えるはずなどないにもかかわらず、それが可能である理由を忘れるわけにはいかない。すなわち、言うまでもないことながら、神による贖罪がなかったならば、我々の礼拝は成立しえないのである。それゆえ旧約においては出エジプトの出来事が礼拝の核であったし、新約においてもキリストの十字架が核であった。

では、その贖罪はどのようにして成就したのか。これまた言うまでもなくイエス・キリストの十字架上の死と肉体を伴ったよみがえりによってである。換言すれば、受肉がなかったならば贖罪は成し遂げられず、我々の神

との和解もなく、礼拝も成立しえなかつたのである。まさにサタンに対する勝利という霊的闘いは、イエスの肉体的業を通して成し遂げられたのである。この霊と肉の一致というところ、我々の礼拝の性質と意味を考える時、きわめて重要な事柄である。

その重要性とは、礼拝の基盤としての重要性ばかりでなく、神との交わりのあり方における重要性でもある。すなわち、受肉の教理は我々に礼拝において神がいかに我々に接近して来られるかを知らせると同時に、我々がいかに神に接近しうるかをも具体的に示してくれる。

まず第一に、受肉は人間性と神性との絶対的背反概念でないことを示してくれる。我々の人間の業が永遠の価値を体现しうるということである。我々は人間であることをやめずとも、聖なる業に参与しうるのである。

第二に受肉の教理は、霊性と物質性との絶対的背反概念でないことを示してくれる。パウロが言うように、肉体をもって霊的業をなしえるのであり、物的要素すなわち空間・時間・芸術などが霊的真理の媒体となりうるのである。

第三に受肉の教理は、一時性と永遠性との絶対的背反概念でないことを示してくれる。我々は神を特定の時に特定の場所で特定の方法によって礼拝するが、そのような一時性も永遠の価値を体现しうるのである。我々の礼拝は、永遠の価値を持ったものである。

第四に受肉は、特殊と普遍との絶対的な違反概念でないことを示してくれる。我々は一時性を持っているがゆえに、それぞれの礼拝は全て個々に異なるものである。二つとして同じ条件下での礼拝はない。すなわち、所謂「普遍的礼拝」というものは存在しない。しかし、それでもその特殊性が普遍性を体现するものとなりえることを受肉は示してくれるのである。換言すれば、個々の異なる礼拝が普遍的・公同的 (Catholic) 教会の礼拝となりうるのである。

これらの点は、何と我々を勇気づけるものではなからうか。我々の能力や知識の限界も、文化的多様性も、聖なる・霊的な・永遠の・普遍的な事柄への参与を妨げるものとはなりえないということであるから。これらの人間の要素は、神によって高められ、神の恵みの手段として用いられるのである。

さて、前述した通り、カルヴァンの中には、霊的側面を強調するあまり肉を一段低いものと見る危険性がある。(実際にカルヴァンが肉を低いものと見ていると筆者が言っているのではない。そう受け取られる危険性があると述べているのである。) それは新生の本体論的变化を強調することによって、救いの基盤を人間の感覚・知性・努力・性質に置くのではないことを示して意義あるものであるが、本体論的变化が強調されるときには、実践的変化をも同時に強調していかなければならない。それは、救いが立場の転換という面だけでなく、自らも救われたことを自覚し喜べるという側面をもっているからである。そして、人が神の主権の中に安んじるとともに、その恵みを無駄にせず自覚的に応答していく者であり続けるためである。

④キリスト教が神秘的 (mystical) な面を失い、知的な面に傾く危険性

前述のごとく、カルヴァンにおいて聖書が語る真理の知的理解に信仰の基盤を置いていることが明らかであるが、この傾向は、逆に理性において理解できないことがらを理解できないままに受け入れることへの困難をもたらす。

神が本来人間の理性では把握しきれない大きなお方である以上、その方を信じる信仰には、理性では (すなわち論理では) 説明しきれないものが伴うことこそ自然ではないだろうか。聖書はキリストご自身のことをも神の

奥義 (mystery of God) と語り (コロ二：二)、福音も神の国の奥義 (マタ一三：一一) であり、前述の受肉自体も奥義である (一テモ三：一六)。

従って、礼拝に出るとき、そこに日常生活のレベルとは何か違う聖きものが感じられてしかるべきである。神に臨在の前に立つ張り詰めた空気、それがなくなってしまうと、礼拝は講演会のようにになってしまう。しかし現実には、礼拝において所謂「畏れ多い」という聖なる空気を感ずることが、福音派では少なくなりがちである。わかりやすい言葉で聖書が解き明かされ、礼拝の中で行なわれていることの一つ一つに丁寧な説明が加えられるのであるから、会衆はそこに、知的レベルは別として、感覚的な意味で神の臨在を感じにくい。そこにはやはり、視覚的・聴覚的にも聖なる高みを感じさせるものがなければならぬのではあるまいか。この意味での神秘性が礼拝に欠如してはならない。

最近、教会堂建築や教会音楽、教会芸術に熱心な教会が増えてきているようであるが、その背景は宣教的視点からのものが多いように見受けられる。すなわち、一般の方々に教会へ招くのにこれらのものが有効に用いられるという視点である。もちろん筆者は、それが間違っているとか好ましくないと言おうとしているのではない。そのような宣教的側面からの物的要素の再評価も重要である。しかし、本稿で取り扱っているような礼拝の非日常性、言い換えればシンボリズムの側面からの再評価も加えられてしかるべきではないかと思うのである。

以上の点が、カルヴァンの強調点が逆にもたらしうる危険性である。何事においてもバランスというものは大事であるが、信仰においてはなおさらそうである。カルヴァンが指摘する通り、朽ちるものは朽ちないものを相続できかないことも事実であるが、一方、朽ちるものをもって神の栄光を具現化しうることが神には可能であるということ

とも事実である。神は被造物を超越したお方であるが、被造物の中に住まわれるお方でもある。さらに神は理性によって把握されうる秩序と論理正しさを持ったお方であるが、理性では把握しきれぬ大きさを持ったお方でもある。それゆえに我々は、カルヴァンの指摘する点もたらしうる危険性を配慮しつつ、礼拝における形あるものの用い方について、日本のキリスト者としての実践を開拓していかなければならないのである。筆者は以下に、日本という文化土壌を考えながら、宣教的視点より、形あるものをどのように用いうるかの提言を試みたい。

六、日本における「形あるもの」の力

クリスチャンになろうとする婦人の中で、仏壇や位牌・お墓などのために洗礼を受けられないと言われる方は決して少なくない。心では信じているし、信仰の告白もしているのであるが、「家の中における嫁としての務めゆえに洗礼だけは無理です」とおっしゃるのである。言い換えれば、仏教の力が強いというよりも、これらの「形あるもの」が彼女たちを縛っているのである。それほど、日本においては「形あるもの」が力を持っていると言える。とすれば、キリスト教がこれらの「形あるもの」に無頓着では、キリスト教を日本に根付かせることは困難ではなからうか。

日本の文化を外国に紹介する目的で書かれた一般書の中に、次のような文章を見つけた。

日本には、仏教・神道・キリスト教などが奇妙に併存している。例えば、日常生活における行事では、深く仏教と係わっていないながら、正月には神社にお参りをし、結婚式は神式やキリスト教式で挙げ、クリスマスイブには全